

A Study on Members' Causal Attribution in Group Goal-directed Activities

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/20503

集団の目標追求活動における 成員の原因帰属に関する研究

太田 雅夫

A study on members' causal attribution in group goal-directed activities

Masao OHTA

研究目的

集団目標を追求する過程で、成員は集団目標がどれほど達成できたかを評価するとともに、そのような結果になったのは、如何なる原因によるかを判断する。それは因果性の認知と考えられるが、また結果に対する対処の一つともみられる。単なる認知レベルでの現象として解明することが求められる場合もあるが、原因の帰属が、集団目標の追求に影響する場合もあると思われる。

本研究では、集団目標を追求する過程における集団の自己調整システムを集団成員が集団目標の達成を如何に自己評価し、如何なる原因帰属をしているかを含めて明らかにしようとした。この研究は、従来から取り組んできた集団システム全般の検討の一環でもあるから、原因帰属を含むシステム全体について分析することになる。

成功または失敗の判定と、その原因の帰属については Weiner, B. ら (1971) 等の研究があるが、ここでは、集団の目標追求過程において成功または失敗が生じた場合、それに対してどのような原因帰属を集団成員が行うかという所に焦点をあてることにした。

研究方法

被験児——被験児は、金沢市立長土堀小学校

の6年男児、20名で、各5名より成る4集団の成員であった。予備検査では、0から9までの乱数系列に各1から5までの数を加えるという作業を課した。15 secの作業量を各の業績としたが、集団の編成には、1から5までの加算数別業績や、集団内成員の業績にはかなりの変動がみられるようにした。しかし、集団内成員の総業績は集団間で小さくなるように努めた。また、ソシオメトリック・テストの結果も考慮し、集団内の成員間に選択や拒否が含まれないように配慮した。

実験手続——実験において成員の行う作業は予備検査の作業と同様であったが、集団内の4名の成員が、ひとり1を加算し、別の一人は2を加算するという具合に各異なる加算作業を行った。4名の作業量の合計を集団業績とした。一試行は15 secで、実験事態、統制事態の各12試行を反復した。成員の一人はリーダーとして、上記の作業を行わず、作業の開始と終了の合図、集団目標または集団業績(実験事態の場合)を板書した。課題は最適化課題であった。

実験事態は、集団目標に関する情報と集団業績に関する情報が成員に与えられる事態であり、統制事態は、集団目標に関する情報は与えられるが、集団業績に関する情報の与えられない事態であった。

各試行は、集団目標の設定と提示、個人目標

の設定、作業の実施、個人業績の報告、集団業績の提示(実験事態のみ)、自己評価、原因帰属という過程より成り立っていた。

原因の帰属は、Heider, F. (1958) を初め、Weiner, B. らが検討した能力、努力、課題の困難性、運を想定し、それらを自己評価後に選択させた。

成功を示す自己評価「ひじょうによくできた」、「まあまあよくできた」、「ふつう」に対しては、「私に作業をする力が十分あったから」(個人能力)、「私がいっしょうけんめい作業したから」(個人努力)、「私には作業(目標)がやさしかったから」(個人課題困難度)、「私がついていた(運がよかった)から」(個人運)の4項目と「皆に作業する力が十分あったから」(集団能力)のように、“私”の代りに“皆”を主語としたものを4項目加え、都合8項目を与えて選択させた。

失敗を示す自己評価「ぜんぜんよくできなかった」、「すこしよくできなかった」、「ふつう」に対しては、「私に作業をする力が十分なかったから」(個人能力)、「私には作業(目標)がむづかかったから」(個人課題困難度)等のように、上記成功の場合とは反対の8項目を設定した。

「ふつう」の自己評価に関しては、両方の原因のどちらも選択することができた。したがって、帰属がいずれであるかによって、自己評価が成功または失敗であるとみなした。

各成員の期待する集団目標、個人目標、個人業績、自己評価、原因帰属の報告は総てテンキーを持つ反応装置によった。

実験期間——実験期間は、予備検査を含めて1986年7月14日から7月23日までであった。

実験結果

1 集団成員の原因帰属

集団成員が集団業績をどのように評価し、そのような結果となった原因をどのように帰属するか、等を明らかにするため、先づ集団成員の事態別 集団帰属・個人帰属別数をみると、表1の通りとなる。この頻度は2つの集団の各4名の12試行の結果に対する反応総数である。したがって、各個人の繰り返し反応を含むものである。実験事態では、「努力」を選択する傾向が強く、統制事態では、「能力」を選択する傾向が顕著である。この場合の伝達情報量(関連度、 $T(X; Y)$)は全体の4%程度である。

これを、成員個人の原因に帰す場合と集団の

表1 事態別 集団帰属・個人帰属別数

	能力	努力	課題	運	計	$T(X; Y)$	$D(Y; X)$	$D(X; Y)$
I	i	7	7	3	11	0.058	0.030	0.066
	g	16	29	13	10			
II	i	11	10	9	21	0.175	0.092	0.176
	g	28	8	6	3			
計	I	23	36	16	21	0.040	0.020	0.040
	II	39	18	15	24			
計	i	18	17	12	32	0.085	0.044	0.087
	g	44	37	19	13			

(注) Iは実験事態、IIは統制事態を、iは個人帰属、gは集団帰属を示す。

原因に帰す場合とに分け、個人的か集団的かということと帰属種別との関連を全体的にみると、8.5%といった所である。

実験事態では集団の原因を指摘すること多く、統制事態ではやや個人に原因を帰す傾向が

認められる。とくに実験事態では、集団の努力を重視するが、統制事態では、個人の運と集団の能力とを挙げることが多い。伝達情報量は実験事態で6%弱、統制事態では17.5%もある。成功の場合と失敗の場合を比較すると、表2の

ようになる。この失敗は、前述の通り、各成員の自己評価の結果が5段階評定で3, 2, 1で、失敗の帰属を選択した場合であり、また成功は成員の自己評価の結果が3, 4, 5で、成員が成功の帰属選択をした場合であった。自己評価が3の場合は、成功または失敗の帰属をするこ

とができたので、この帰属の仕方に応じて成功、失敗を区分したのである。実験事態と統制事態を通じて、成功が圧倒的に多く、 $T(X; Y)$ は1.7%である。これを実験集団と統制集団の別にみると、実験集団では3%弱であるのに対して、統制集団では9.8%であった。

表2 事態別 自己評価 (S・F) 別 原因帰属別数

		能力	努力	課題	運	計	$T(X; Y)$	$D(Y; X)$	$D(X; Y)$
I	S	15	30	11	14	70	0.025	0.013	0.030
	F	8	6	5	7	26			
II	S	39	15	11	20	85	0.098	0.052	0.192
	F	0	3	4	4	11			
計	S	54	45	22	34	155	0.017	0.009	0.024
	F	8	9	9	11	37			

(注) Sは成功, Fは失敗を示す。

自己評価別の帰属の仕方を示すと表3のようになる。ここでの評価は、標準点であり、成員の集団平均評価に対して各成員がどのような帰属をするかをみたものである。実験事態では自己評価が2から5まで広く分布しているが、統制事態では3と4の自己評価に限られている。統制事態では、あまり自己評価が広く分布しないという特徴がみられる。実験事態では自己評価が普通の場合が多く、しかも「努力」、「運」が多い。しかし、統制事態では「まあまあよくできた」が多く、「能力」、「運」、「努力」等が顕著である。帰属が個人的なものか、集団的なものを分けてみると、実験事態では、特に普通の評価(3の評価)で皆の努力に帰属させることが多く、統制事態では、皆の能力や個人の運に帰することが多い。

集団内の各成員の自己評価は様々であるが、

その成員自身の評価とその成員の行う帰属とがいかなる関連を持つかをみるため、成員自身の自己評価別帰属の仕方を示すと表4のようになる。当然のことながら、評定はばらつきが大きく、両事態共4の評定が全体的に多いが、実験事態では努力に帰属させることが目立つ。統制事態では結果が良かった場合(5の評定)の大部分は能力に帰属している。4に評定する場合は努力や運に帰属することが若干多いが、他の帰属も比較的多く行われる。

帰属が個人的なものか、集団的なものを分けて、自己評価の集団平均別集団帰属・個人帰属別数をみると表5のようになる。実験事態では評価のどの段階でも集団帰属が多い。したがって、 $T(X; Y)$ は1.2%とかなり低い。これに対して、統制事態では、3の評定では個人帰属が多く、 $T(X; Y)$ は、1.5%とやはり低い。

表3 事態別 自己評価 (集団) 別 原因帰属別数

		評価	能力	努力	課題	運	計	$T(X; Y)$	$D(Y; X)$	$D(X; Y)$
I	2	5	6	6	3	20	0.043	0.022	0.023	
	3	8	18	6	12	44				
	4	6	8	2	4	20				
	5	4	4	2	2	12				
II	3	11	8	3	6	28	0.012	0.006	0.014	
	4	30	12	11	15	68				

表 4 事態別 自己評価（個人）別 原因帰属別数

		評価	能力	努力	課題	運	計	T(X; Y)	D(Y; X)	D(X; Y)
I	}	2	6	4	2	5	17	0.161	0.083	0.084
		3	5	3	8	4	20			
		4	5	22	2	8	37			
		5	7	7	4	4	22			
II	}	2	0	1	4	3	8	0.293	0.154	0.173
		3	2	3	0	5	10			
		4	11	9	8	14	42			
		5	26	5	3	2	36			

表 5 事態別 自己評価（集団）別 集団帰属・個人帰属別数

評価	i	g	計	T(X; Y)	D(Y; X)	D(X; Y)	
I	}	2	5	15	0.012	0.014	0.007
		3	15	29			
		4	4	16			
		5	4	8			
II	}	3	18	10	0.015	0.015	0.017
		4	33	35			

表 6 事態別 自己評価（個人）別 集団帰属・個人帰属別数

評価	i	g	計	T(X; Y)	D(Y; X)	D(X; Y)	
I	}	2	8	9	0.024	0.027	0.012
		3	5	15			
		4	10	27			
		5	5	17			
II	}	2	7	1	0.049	0.049	0.049
		3	7	3			
		4	20	22			
		5	17	19			

これを個々の成員の自己評価別にみると、表 6 の如くなる。実験事態では、どの評定段階でも集団帰属が多いが、集団平均の場合は 3 の段階で極めて集団帰属が多かったのに対して、個々の成員の自己評価では 4 の段階で多くなる。そして T(X; Y) も 2.4% と増加する。統制事態では 2 および 3 の評定段階で個人帰属が多く、T(X; Y) は 4.9% にもなる。

成員の原因帰属が、 $P(t) - G(t) = -\epsilon(t)$ と如何に関連するかをみるために、 $-\epsilon(t)$ 別数をみると表 7 のようになる。実験事態では、 $-\epsilon(t)$ が 0

に近い所即ち結果がうまくいったと考えられる場合には、努力に帰属することが多い。しかし、統制事態では、0 の場合は、帰属があまり集中せず、 $-\epsilon(t)$ が -1 とか +1 では、能力に帰属する傾向が現われる。T(X; Y) は実験事態で 20.6% と高く、統制事態でも 16.7% である。

成員の原因帰属が、個人の業績と個人の設定した個人目標との差と如何に関連するかをみるために、 $P_k(t) - GI_k(t) = -\epsilon_k(t)$ 別数をみると表

表 7 事態別 $-\epsilon(t)$ 別 原因帰属別数

		能力	努力	課題	運	計	T(X; Y)	D(Y; X)	D(X; Y)	
I	}	-2 以下	2	2	2	6	0.206	0.106	0.108	
		-1	2	6		8				
		0	11	15	12	6				44
		1	6	13	1	8				28
		2 以上	2		1	1				4
II	}	-2 以下	8	9	6	5	0.167	0.088	0.077	
		-1	18	1	4	9				32
		0	4	3		5				12
		1	6	1	2	3				12
		2 以上	3	4	3	2				12

8 のようになる。実験事態で $-\epsilon_k(t)$ が 0 の場合努力に集中し、統制事態での 0 では能力に、-1 ではむしろ運に集中する。T(X;Y) は、実験事

態で 2.3%、統制事態では、12.5% と統制事態がかなり大きい。

原因帰属を集団帰属、個人帰属に分けて、そ

表 8 事態別 $-\epsilon_k(t)$ 別 原因帰属別数

		能力	努力	課題	運	計	T(X;Y)	D(Y;X)	D(X;Y)
I	-1	12	15	6	13	46	0.023	0.012	0.023
	0	11	21	10	8	50			
II	-2		1		2	3	0.125	0.066	0.115
	-1	7	7	4	13	31			
	0	32	10	11	9	62			

れが $-\epsilon(t)$ と如何に関連するかをみると、表 9 のようになる。実験事態では $-\epsilon(t)$ の殆どの段階で集団帰属が多い。しかし統制事態では、 $-\epsilon(t)$ が -1 の段階では、むしろ集団帰属が優位を占めるが、0 から離れると個人帰属になる傾向がみられる。ここでの T(X;Y) は統制事態の方が高く、4.8% となっている。

集団帰属、個人帰属が $-\epsilon_k(t)$ と如何なる関連をなすかをみると、表 10 の通りとなる。実験事態ではどの段階でも集団帰属が多く、統制事態では 0 の段階では集団帰属が、-1 では個人帰属が多い。統制事態での T(X;Y) は 5.3% とかなり高い。

表 9 事態別 $-\epsilon(t)$ 別 集団帰属・個人帰属別数

		i	g	計	T(X;Y)	D(Y;X)	D(X;Y)
I	-2 以下	4	8	12	0.033	0.038	0.017
	-1	1	7	8			
	0	10	34	44			
	1	11	17	28			
	2 以上	2	2	4			
II	-2 以下	17	11	28	0.048	0.048	0.022
	-1	12	20	32			
	0	6	6	12			
	1	7	5	12			
	2 以上	9	3	12			

表 10 事態別 $-\epsilon_k(t)$ 別 集団帰属・個人帰属別数

		i	g	計	T(X;Y)	D(Y;X)	D(X;Y)
I	-1	17	29	46	0.020	0.022	0.020
	0	11	39	50			
II	-2	3		3	0.053	0.053	0.048
	-1	20	11	31			
	0	28	34	62			

2 集団目標および集団業績に関する情報と集団業績との関係

次に、集団業績が集団目標と過去の集団業績との偏差に如何に関係するかをみるため、t 試

行における集団目標 G(t) と t-1 試行における集団業績の偏差 D に対する集団業績の回帰係数および相関係数を求めると、表 11 の通りになる。実験事態において、正の関連が認められるが、あまり顕著ではない。

集団業績が集団目標および過去の集団業績と如何に関連するかを、それらの変数の一次結合としてみるため、それらの変数に対する重回帰係数および重相関係数を求めると表 12-(1) の通りとなる。集団目標には正に、集団業績には負に関連する傾向が実験事態で認められるが、

表 11 D に対する P (t) の帰帰係数および相関係数

	C	α_{35}	γ	t	
I	1	80.825	.528	.344	1.099
	2	88.909	.564	.366	1.180
II	3	47.000	-.083	-.117	.353
	4	83.374	.353	.169	.514

注) I は実験事態を, II は統制事態を示す。

1 から 4 の数字は集団を示す。

あまり顕著ではない。これら変数間の偏相関は表 12-(2)の通りであるが、実験事態での G(t) と E⁻¹P(t) との間で有意となる程度である。

これを、集団目標の変化量および過去の集団目標と集団業績との偏差に分割し、それらとの関係をみよう。集団業績がそれらに対する重回帰係数および重相関係数を求めると、表 13-(1)

表 12-(1) G (t), E⁻¹P (t) に対する P (t) の重回帰係数および重相関係数

	C	α_{31}	α_{32}	R	F	
I	1	45.336	.685	-.189	.733	2.716
	2	88.597	.566	-.562	.366	.360
II	3	9.776	.317	.495	.657	1.770
	4	19.200	.289	.544	.927	14.297**

注) ** P < .01

表 12-(2) P (t), G (t), E⁻¹P (t) 間の偏相関係数

	γ_{12-3}	t	γ_{13-2}	t	γ_{23-1}	t	
I	1	.544	1.834	-.168	.483	.823	4.099**
	2	.346	1.043	-.354	1.072	.838	4.344**
II	3	.406	1.258	.566	1.940	-.134	.382
	4	.346	1.044	.532	1.777	.545	1.840

注) ** P < .01

偏相関 γ のサフィックス 1, 2, 3 は P (t), G (t), E⁻¹P (t) の各変数を示す。

表 13-(1) (1-E⁻¹) G (t), E⁻¹ ϵ (t) に対する P (t) の重回帰係数および重相関係数

	C	α_{21}	α_{13}	R	F	
I	1	80.896	.510	.530	.345	.314
	2	90.583	.091	.551	.498	.770
II	3	46.257	-.108	-.529	.602	1.329
	4	87.596	.262	.694	.286	.207

表 13-(2) P (t), (1-E⁻¹) G (t), E⁻¹ ϵ (t) 間の偏相関係数

	γ_{12-3}	t	γ_{13-2}	t	γ_{23-1}	t	
I	1	.272	.801	.344	1.037	-.771	3.427**
	2	.050	.142	.381	1.166	-.718	2.917**
II	3	-.186	.535	-.538	1.805	-.704	2.800*
	4	.128	.364	.272	.800	-.697	2.749*

注) * P < .05

** P < .01

の通りとなる。実験事態では両変数に対して正の関連を示すが、顕著ではない。また、これらの変数間の偏相関をみると、表 13-(2)の通りであるが、集団業績は、過去の集団目標と集団業績との偏差に強く関連し、集団目標の変化量にはあまり強い関連を示さない。また、集団目標の変化量と過去の集団目標と集団業績との偏差との関連は実験事態、統制事態共いずれも負となり、しかも有意である。

3 集団目標および集団業績に関する情報と集団目標との関係

集団目標が過去の集団業績からの集団目標の偏差 $-E^{-1}\epsilon(t)$ との関係を見るため、 $t-1$ 試行における偏差に対する t 試行の集団目標の係数を示すと表 14 の通りとなる。この変数に対して負に関連することがむしろ多く、実験事態でのこの傾向は、目標設定には、過去の目標が関連しているのではないかと感じられる。

表 14 $-E^{-1}\epsilon(t)$ に対する $G(t)$ の回帰係数および相関係数

	C	α_{63}	γ	t	
I	1	72.842	-.633	-.451	1.516
	2	90.767	-.586	-.555	2.002*
II	3	43.928	.489	.644	2.525*
	4	75.480	-.506	-.227	.699

注) * $P < .05$

そこで、より一般的に集団目標の設定が過去の集団目標および集団業績に如何に影響されるかについてみるため、 t 試行の集団目標が $t-1$ 試行の集団目標と集団業績に対する係数を示すと表 15-(1)の通りとなる。 α_{62} 、 α_{61} の殆どは正で、負となる一つの集団を除いて重相関は大きく有意である。これらの変数間の偏相関は表 15-(2)の通りとなる。集団目標は過去の目標に関連して変化させる集団が多い。

4 集団目標および集団業績に関する情報と

表 15-(1) $E^{-1}P(t)$ 、 $E^{-1}G(t)$ に対する $G(t)$ の重回帰係数および重相関係数

	C	α_{62}	α_{61}	R	F	
I	1	6.310	.438	.430	.934	16.046**
	2	25.706	.251	.479	.931	15.162**
II	3	60.835	.280	-.646	.709	2.356
	4	-4.966	.837	.164	.921	13.116**

注) ** $P < .01$

表 15-(2) $G(t)$ 、 $E^{-1}P(t)$ 、 $E^{-1}G(t)$ 間の偏相関係数

	γ_{12-3}	t	γ_{13-2}	t	γ_{23-1}	t	
I	1	.539	1.810	.646	2.394*	.191	.551
	2	.408	1.262	.776	3.478**	.132	.377
II	3	.358	1.085	-.703	2.796*	.391	1.201
	4	.625	2.263*	.183	.526	.586	2.045*

達成についての自己評価との関係

集団の結果に対する成員の自己評価が集団業績と集団目標との差に如何に関連するかをみるため、その差に対する評定の集団平均の係数をみると、表 16 の通りとなる。実験集団の一つを除いてはあまり顕著な相関はない。

自己評定の集団業績および集団目標に対する

表 16 $-\epsilon(t)$ に対する $V(t)$ の回帰係数および相関係数

	C	α_{63}	γ	t	
I	1	2.728	.092	.920	7.423**
	2	3.598	-.010	-.109	.347
II	3	4.195	.010	.134	.428
	4	3.767	.021	.337	1.132

注) ** $P < .01$

係数を示すと表 17—(1)のようになる。集団業績に対しては正に関連し、また集団目標に対しては負に関連することが多いが、有意なのは実験事態の一集団のみである。これらの変数相互の偏相関をみると、表 17—(2)の通りとなる。重相

関の顕著な実験集団の一つでは、自己評価は集団業績に対しては正、集団目標に対しては負に強く関連することがわかる。しかしそれ以外の集団では顕著ではない。

表 17—(1) P (t), G (t) に対する V (t) の重回帰係数および重相関係数

	C	α_{s2}	α_{s1}	R	F	
I	1	2.394	.098	-.093	.922	15.085**
	2	1.420	.009	.016	.232	.152
II	3	4.749	.003	-.015	.169	.078
	4	3.284	.028	-.023	.394	.490

注) ** P < .01

表 17—(2) V (t), P (t), G (t) 間の偏相関係数

	$\gamma_{12\cdot3}$	t	$\gamma_{13\cdot2}$	t	$\gamma_{23\cdot1}$	t	
I	1	.882	5.601**	-.921	7.095**	.968	11.473**
	2	.068	.206	.162	.493	.478	1.634
II	3	.029	.086	-.169	.513	.204	.626
	4	.394	1.285	-.368	1.186	.930	7.604**

注) ** P < .01

5 集団目標および集団業績に関する情報と成員の個人業績との関係

集団成員が、集団および個人（自己）に関する情報に如何に影響を受けているかをみることにしよう。まず、個人の業績が集団目標と過去の集団業績との偏差に如何に関連するかをみるために、その偏差に対する個人業績の係数を示すと表 18 の通りとなる。正の関連をもつ者でかなり顕著な値を示す者がみられるが、あまり多くない。

個人の業績が集団目標および過去の集団業績と如何に関連するかをみるために、それらに対する個人業績の係数を示すと表 19—(1)の通りとなる。有意な相関となる者も若干みられる。これらの変数間の偏相関をみると表 19—(2)のようになる。

集団目標の変化量および集団目標と集団業績との偏差に対して個人の業績が如何に関連するかを示したのが表 20—(1)である。高い相関を示

表 18 D に対する $P_k(t)$ の回帰係数および相関係数

	C	α_{s1}	γ	t	
I	1	18.355	.043	.095	.286
	2	23.965	.402	.663	2.657*
	3	20.044	.005	.009	.027
	4	18.460	.078	.209	.641
II	1	13.727	.005	.010	.030
	2	35.455	-.032	-.021	.063
	3	12.636	-.118	-.307	.968
	4	27.091	.709	.659	2.628*
III	1	11.816	-.043	-.141	.427
	2	12.224	-.189	-.410	1.349
	3	11.667	.181	.715	3.068**
	4	11.293	-.032	-.194	.593
IV	1	15.913	.055	.106	.320
	2	33.365	.162	.144	.437
	3	15.029	.031	.069	.207
	4	19.067	.105	.303	.954

注) 各集団内の 1 ~ 4 までの数は、成員を示す

* P < .05

** P < .01

表 19—(1) G (t), E⁻¹P (t) に対する P_k (t) の重回帰係数および重相関係数

		C	α_{311}	α_{321}	R	F		
I	1	1	4.898	.102	.086	.840	5.585*	
		2	14.006	.446	-.307	.807	4.354*	
		3	7.277	.062	.117	.575	1.154	
		4	19.156	.075	-.084	.216	.114	
	2	1	7.382	.047	.025	.293	.219	
		2	66.168	-.237	-.110	.357	.341	
		3	10.958	-.107	.126	.317	.260	
		4	4.090	.862	-.603	.759	3.170	
	II	3	1	-5.726	.146	.237	.731	2.677
			2	9.132	-.156	.223	.419	.496
			3	.427	.301	-.056	.904	10.397**
			4	5.944	.025	.091	.443	.569
4		1	1.386	.040	.148	.845	5.826*	
		2	3.056	.132	.261	.812	4.528*	
		3	3.823	.020	.125	.737	2.778	
		4	10.935	.096	.009	.762	3.236	

注) * P < .05

** P < .01

表 19—(2) P_k (t), G (t), E⁻¹P (t) 間の偏相関係数

		γ_{12-3}	t	γ_{13-2}	t	γ_{23-1}	t		
I	1	1	.381	1.166	.315	.938	.656	2.459*	
		2	.776	3.479**	-.630	2.292*	.922	6.733**	
		3	.119	.339	.213	.615	.833	4.254**	
		4	.199	.575	-.215	.623	.889	5.497**	
	2	1	.119	.339	.065	.185	.800	3.773**	
		2	-.154	.441	-.075	.212	.792	3.669**	
		3	-.265	.776	.317	.944	.830	4.204**	
		4	.755	3.255**	-.640	2.354*	.894	5.642**	
	II	3	1	.471	1.508	.649	2.414*	-.220	.638
			2	-.271	.795	.370	1.126	.214	.620
			3	.903	5.961**	-.362	1.098	.378	1.155
			4	.127	.361	.416	1.292	.062	.177
4		1	.145	.413	.438	1.380	.754	3.242**	
		2	.198	.570	.339	1.018	.780	3.530**	
		3	.066	.186	.347	1.047	.837	4.323**	
		4	.396	1.221	.037	.104	.828	4.181**	

注) * P < .05

** P < .01

す者も少々はあるが、あまり多くない。これらの変数間の偏相関は表 20—(2)の通りである。

6 集団目標および集団業績に関する情報、個

人目標および個人業績と成員の期待する集団目標との関係

まず、過去の集団業績からの集団目標の偏差

表 20—(1) $(1-E^{-1})G(t)$, $E^{-1}\epsilon(t)$ に対する $P_k(t)$ の重回帰係数および重相関係数

		C	α_{341}	α_{331}	R	F	
I	1	1	18.951	-.107	.059	.452	.599
		2	23.868	.427	.400	.665	1.852
		3	20.072	-.002	.006	.019	.000
		4	18.004	.193	.066	.462	.634
	2	1	13.857	-.032	.004	.106	.027
		2	36.065	-.204	-.036	.127	.038
		3	12.471	-.071	-.117	.335	.295
		4	28.190	.398	.701	.732	2.687
II	3	1	11.462	-.054	-.255	.679	1.992
		2	12.017	-.196	-.313	.483	.711
		3	11.504	.175	.083	.803	4.243
	4	4	11.274	-.033	-.044	.205	.102
		1	16.849	.034	.130	.233	.134
		2	34.422	.140	.248	.180	.078
		3	16.717	-.005	.168	.430	.529
		4	19.609	.093	.148	.352	.330

表 20—(2) $P_k(t)$, $(1-E^{-1})G(t)$, $E^{-1}\epsilon(t)$ 間の偏相関係数

		$\gamma_{12\cdot3}$	t	$\gamma_{13\cdot2}$	t	$\gamma_{23\cdot1}$	t		
I	1	1	-.208	.601	.143	.409	-.696	2.743*	
		2	.601	2.129*	.661	2.489*	-.847	4.508**	
		3	-.002	.006	.010	.028	-.750	3.206**	
		4	.424	1.323	.195	.563	-.749	3.197**	
	2	1	-.062	.177	.009	.027	-.755	3.253**	
		2	-.100	.284	-.024	.068	-.755	3.258**	
		3	-.145	.413	-.307	.912	-.757	3.277**	
		4	.373	1.138	.691	2.700*	-.766	3.365**	
	II	3	1	-.237	.690	-.619	2.229*	-.703	2.794*
			2	-.436	1.371	-.471	1.510	-.784	3.571**
			3	.758	3.290**	.356	1.076	-.714	2.881*
		4	4	-.198	.571	-.182	.523	-.738	3.097**
1			.068	.192	.208	.601	-.691	2.706*	
2			.123	.351	.180	.516	-.700	2.769*	
3			-.012	.034	.317	.946	-.654	2.447*	
4			.272	.799	.351	1.059	-.721	2.940**	

注) * $P < .05$ ** $P < .01$

に対して個人の期待する集団目標を如何に決定するかをみることにしよう。その偏差に対する期待する集団目標の係数を示すと表 21 の通りとなる。集団全体の結果と同様、各個人も負の関係を示す者が多い。

集団業績および集団目標に対しての期待する

集団目標の係数を示すと表 22—(1)の通りとなる。集団業績、集団目標共に正の関連を示す者が多い。有意な相関を示す者はやはり圧倒的に正の相関である。またこれらの変数間の偏相関をみると表 22—(2)の通りとなる。

集団業績と集団目標との偏差および成員個人

表 21 $-E^{-1}\varepsilon(t)$ に対する $G_k(t)$ の回帰係数および相関係数

	C	α_{621}	γ	t		
I	1	1	51.221	-.602	-.477	1.628
		2	75.793	-.965	-.660	2.636*
		3	91.857	-.979	-.332	1.056
		4	71.164	.092	.083	.250
	2	1	88.640	-.501	-.312	.985
		2	87.689	-1.064	-.548	1.965*
		3	91.763	-.310	-.453	1.524
		4	94.742	-.504	-.492	1.695
II	3	1	32.344	.067	.404	1.325
		2	44.530	.676	.661	2.643*
		3	48.000	—	—	—
		4	50.220	1.199	.510	1.779
	4	1	36.375	.682	.168	.511
		2	94.673	-.272	-.222	.683
		3	82.220	-1.930	-.568	-2.070*
		4	87.829	-.521	-.190	.581

注) * $P < .05$

の業績と目標との偏差のどちらにより強く影響を受けるかを検討するために、それらの変数に対する個人の期待する集団目標の標準回帰係数

をみると表 23—(1)の通りとなる。ある者は個人の偏差に影響を受け、また他の者は集団の偏差に影響を受けるようである。それらの変数間の偏相関を示すと表 23—(2)のようである。

7 集団目標および集団業績に関する情報、個人目標および個人業績と成員の自己評価との関係

集団業績と集団目標との差に対する個人の自己評価の関連を示したのが表 24 である。正の相関が多く、特に高い相関の者は正である。

集団業績および集団目標に対する成員の自己評価は、表 25—(1)に示されている。集団業績には正、集団目標には負となる者が多く、かなり高い相関を示す者は概してそのようになっている。これらの変数間の偏相関は表 25—(2)の通りであるが、ここでも同様の傾向が認められる。

集団業績と集団目標との偏差および個人業績と個人目標との偏差に対して自己評価が如何なる関連かを示す標準回帰係数は表 26—(1)のようである。実験集団では集団情報に正となる者が多いが、統制集団では負の者が多い。これら

表 22—(1) $E^{-1}P(t)$, $E^{-1}G(t)$ に対する $G_k(t)$ の重回帰係数および重相関係数

	C	α_{621}	α_{611}	R	F		
I	1	1	33.042	-.309	.546	.538	.952
		2	33.265	-.280	.835	.829	5.127*
		3	-50.110	1.306	.545	.896	9.537**
		4	12.029	1.044	-.272	.929	14.593**
	2	1	-.087	.640	.355	.740	2.830
		2	-29.034	.436	.872	.913	11.626**
		3	45.643	.283	.234	.936	16.605**
		4	93.179	-.483	.502	.492	.746
II	3	1	31.592	.077	-.061	.407	.464
		2	61.732	.464	-.836	.697	2.207
		3	48.001	—	—	—	—
		4	105.785	.514	-1.717	.599	1.304
	4	1	-54.472	2.199	-1.069	.580	1.180
		2	59.241	.320	.121	.753	3.051
		3	-13.314	-.335	1.523	.899	9.795**
		4	-13.367	1.169	.090	.933	15.627**

注) * $P < .05$

** $P < .01$

の変数間の偏相関は表 26—(2)に示されている。 これも同様の傾向を示している。

表 22—(2) $G_k(t)$, $E^{-1}P(t)$, $E^{-1}G(t)$ 間の偏相関係数

		$\gamma_{12\cdot3}$	t	$\gamma_{13\cdot2}$	t	$\gamma_{23\cdot1}$	t	
I	1	1	-.208	.602	.452	1.432	.826	4.150**
		2	-.243	.709	.709	2.843*	.747	3.173**
		3	.591	2.070*	.380	1.163	.402	1.241
		4	.881	5.267**	-.548	1.851	.815	3.973**
	2	1	.377	1.152	.310	.922	.568	1.952*
		2	.353	1.067	.737	3.079**	.232	.676
		3	.630	2.291*	.695	2.733*	-.003	.007
		4	-.349	1.053	.487	1.575	.807	3.861**
II	3	1	.345	1.041	-.308	.916	.293	.868
		2	.421	1.311	-.682	2.640*	.426	1.331
		3	—	—	—	—	—	—
		4	.196	.566	-.598	2.111*	.282	.831
	4	1	.483	1.559	-.303	.901	.908	6.109**
		2	.314	.934	.146	.418	.811	3.917**
		3	-.183	.526	.710	2.848*	.762	3.324**
		4	.700	2.770*	.090	.254	.586	2.047*

注) * $P < .05$

** $P < .01$

表 23—(1) $-E^{-1}\epsilon(t)$, $-E^{-1}\epsilon_k(t)$ に対する $G_k(t)$ の標準回帰係数

		a_{632}	a_{633}	
I	1	1	-.573	.161
		2	-.826	.396
		3	.065	-.520
		4	.488	-.727
	2	1	-.307	.036
		2	-.710	.628
		3	-.341	.382
		4	-.526	-.230
II	3	1	-.415	1.063
		2	.535	-.274
		3	—	—
		4	.647	-.273
	4	1	.437	-.504
		2	.140	-.484
		3	-.558	-.058
		4	-.193	.183

表 23—(2) $G_k(t)$, $-E^{-1}\epsilon(t)$, $-E^{-1}\epsilon_k(t)$ 間の偏相関係数

		$\gamma_{12\cdot3}$	t	$\gamma_{13\cdot2}$	t	$\gamma_{23\cdot1}$	t	
I	1	1	-.469	1.500	.147	.421	.588	2.056*
		2	-.750	3.211**	.478	1.538	.603	2.137*
		3	.048	.135	-.355	1.073	.731	3.033**
		4	.455	1.446	-.606	2.155*	.670	2.554*
	2	1	-.305	.904	.038	.106	-.128	.365
		2	-.766	3.371**	.725	2.980**	.670	2.553*
		3	-.372	1.134	.410	1.271	-.096	.273
		4	-.526	1.751	-.261	.765	-.262	.767
II	3	1	-.397	1.222	.742	3.128**	.768	3.392**
		2	.556	1.894*	-.325	.972	-.179	.515
		3	—	—	—	—	—	—
		4	.560	1.914*	-.275	.808	.553	1.878*
	4	1	.384	1.175	-.432	1.354	.611	2.180*
		2	.100	.285	-.328	.982	.738	3.093**
		3	-.557	1.896*	-.069	.197	.099	.280
		4	-.196	.564	.186	.536	.050	.143

注) * $P < .05$

** $P < .01$

表 24 $-\varepsilon(t)$ に対する $V_k(t)$ の回帰係数および相関係数

		C	α_{831}	γ	t	
I	1	1	2.170	.113	.700	3.100**
		2	3.423	.052	.338	1.136
		3	2.997	.083	.649	2.698*
		4	2.321	.121	.848	5.060**
	2	1	3.156	.008	.073	.231
		2	4.072	.008	.127	.405
		3	3.546	-.032	-.252	.823
		4	3.620	-.026	-.213	.689
II	3	1	3.691	.042	.400	1.380
		2	3.875	.029	.605	2.403*
		3	4.661	.004	.039	.123
		4	4.553	-.037	-.329	1.102
	4	1	2.551	.062	.454	1.611
		2	4.928	-.000	-.028	.089
		3	3.065	.031	.261	.855
		4	4.524	-.010	-.119	.379

注) * $P < .05$

** $P < .01$

表 25-1) $P(t)$, $G(t)$ に対する $V_k(t)$ の重回帰係数および重相関係数

		C	α_{821}	α_{811}	R	F	
I	1	1	.961	.132	-.116	.713	2.757
		2	5.536	.018	-.046	.417	.562
		3	1.639	.105	-.087	.676	2.239
		4	1.439	.135	-.124	.855	7.245*
	2	1	2.919	.010	-.007	.075	.015
		2	4.265	.006	-.009	.130	.046
		3	.038	-.000	.041	.354	.383
		4	-1.543	.020	.039	.443	.651
II	3	1	2.358	.058	-.029	.434	.618
		2	3.945	.029	-.030	.605	1.539
		3	7.763	-.034	-.034	.376	.440
		4	4.932	-.042	.034	.332	.330
	4	1	2.642	.061	-.062	.454	.693
		2	4.236	.010	-.002	.518	.980
		3	2.163	.046	-.035	.326	.317
		4	4.096	-.003	.008	.182	.092

注) * $P < .05$

表 25—(2) $V_k(t)$, $P(t)$, $G(t)$ 間の偏相関係数

		γ_{12-3}	t	γ_{13-2}	t	γ_{23-1}	t	
I	1	1	.656	2.610*	-.713	3.050**	.916	6.826**
		2	.097	.292	-.306	.964	.831	4.485**
		3	.637	2.476*	-.673	2.731*	.911	6.626**
		4	.805	4.070**	-.855	4.941**	.949	8.988**
	2	1	.066	.197	-.065	.194	.499	1.728
		2	.072	.215	-.129	.391	.501	1.736
		3	-.005	.015	.315	.994	.473	1.612
		4	.134	.404	.327	1.037	.422	1.396
II	3	1	.412	1.358	-.245	.757	.280	.874
		2	.476	1.623	-.534	1.896	.405	1.327
		3	-.237	.731	-.260	.807	.128	.388
	4	1	-.276	.863	.248	.769	.257	.798
		2	.389	1.268	-.448	1.503	.931	7.657**
	4	1	.279	.873	-.057	.172	.897	6.081**
		2	.325	1.030	-.290	.911	.926	7.352**
		3	-.028	.085	.098	.295	.917	6.888**

注) * $P < .05$

** $P < .01$

表 26—(1) $-\epsilon(t)$, $-\epsilon_k(t)$ に対する $V_k(t)$ の標準回帰係数

		a_{832}	a_{833}	
I	1	1	.467	.395
		2	.168	.404
		3	.032	.839
		4	.883	-.065
	2	1	.058	-.088
		2	.258	-.589
		3	-.234	.068
		4	-.518	.627
II	3	1	-.586	1.286
		2	.619	.031
		3	-.080	.817
	4	1	-.379	.101
		2	.396	.109
	4	1	-.109	.145
		2	.153	.643
		3	-.115	-.223

表 26—(2) $V_k(t)$, $-\epsilon(t)$, $-\epsilon_k(t)$ 間の偏相関係数

		γ_{12-3}	t	γ_{13-2}	t	γ_{23-1}	t	
I	1	1	.509	1.772	.447	1.499	.227	.699
		2	.174	.529	.390	1.269	.314	.991
		3	.043	.130	.748	3.381**	.455	1.532
		4	.814	4.201**	-.102	.307	.400	1.310
	2	1	.057	.173	-.087	.261	-.161	.491
		2	.297	.933	-.579	2.131*	.346	1.105
		3	-.227	.700	.068	.204	-.245	.759
		4	-.488	1.678	.560	2.028*	.625	2.404*
II	3	1	-.688	2.843*	.901	6.238**	.861	5.079**
		2	.567	2.063*	.034	.103	-.404	1.325
		3	-.134	.404	.809	4.134**	.193	.590
	4	1	-.330	1.049	.093	.279	.498	1.722
		2	.353	1.132	.104	.313	.460	1.554
	4	1	-.091	.274	.121	.364	.560	2.028*
		2	.202	.620	.657	2.614*	-.009	.027
		3	-.118	.355	-.225	.693	-.009	.027

注) * $P < .05$

** $P < .01$

考 察

この研究では、集団の目標追求過程における成員の原因帰属に焦点を当て、自己調整システ

ム全体をさらに解明しようとした。しかし、対象とした集団はわずかであり、今後も検討を重ねていかなければならない。

〈付記〉この研究は、金沢市立長土堀小学校の勝田 徹教諭、藤田 実教諭の御協力をえて行われ、西窪 勉校長、本倉孝造教頭はじめ教職員の方々に御世話になった。ここに深く感謝する次第である。

参考文献

- Festinger, L., 1942 Wish, expectation, and group standard as factors influencing level of aspiration. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 37, 184-200
- Hall, R. L., 1957 Group performance under feedback that confounds responses of group members. *Sociometry*, 20, 277-305
- Heider, F., 1958 *The psychology of interpersonal relations*. Wiley
- Heise, G. A. and Miller, G. A., 1951 Problem solving by small groups using various communication nets. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 16, 327-333
- Jenkins, D. H., 1948 Feedback and group self-evaluation. *Journal of Social Issues*, 4, 50-60
- 狩野素朗, 1971 課題解決集団の能率および成員満足感におよぼすコミュニケーション構造特性と課題特性の関連に関する実験的研究 *教育社会心理学研究*, 10, 133-144
- Leavitt, H. J., 1951 Some effects of certain communication patterns on group performance. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 46, 38-50
- Leavitt, H. J. and Mueller, R. A. H., 1951 Some effects of feedback on communication. *Human Relations*, 4, 401-410
- Medow, H. and Zander, A., 1965 Aspirations for the group chosen by central and peripheral members. *Journal of personality and Social Psychology*, 1, 224-228
- 三隅二不二 1978 *リーダーシップ行動の科学* 有斐閣
- 太田雅夫 1957 討議集団の自己調整機構の研究 1 *心理学研究*, 28, 74-85
- 太田雅夫 1974 集団の自己調整システム *金沢大学教育学部紀要*, 23, 181-195
- 太田雅夫 1975 集団の自己調整システム：フィードバック情報による集団目標と集団業績の調整 *金沢大学教育学部紀要*, 24, 17-30
- 太田雅夫 1976 集団課題解決におけるコミュニケーションの役割 *金沢大学教育学部 教育工学研究*, 1, 71-85
- 太田雅夫 1977 小集団の自己調整システム：フィードフォワードとフィードバックの効果 *心理学研究*, 48, 4, 224-229
- 太田雅夫 1978 集団の自己調整システム：集団過程調整のための情報交換 *金沢大学教育学部紀要*, 26, 105-117
- 太田雅夫 1981 a 目標追求活動における自己調整システム：要求水準実験の一考察 *金沢大学教育学部紀要*, 29, 1-9
- 太田雅夫 1981 b 目標追求活動における自己調整システム：要求水準の達成過程の分析(1) *金沢大学教育学部 教育工業研究*, 7, 105-113
- 太田雅夫 1982 目標追求活動における自己調整システム：要求水準の達成過程の分析(3) *金沢大学教育学部 教育工学研究*, 8, 49-60
- 太田雅夫 1983 集団の自己調整システム：業績調整課題と要求水準課題の比較 *金沢大学教育学部紀要*, 32, 155-164
- 太田雅夫 1984 集団の自己調整システム：フィードフォワードとフィードバックの集団および個人活動に及ぼす効果 *金沢大学教育学部紀要*, 33, 1-13
- 太田雅夫 1985 集団の自己調整システム：フィードフォワードとフィードバックの集団および個人活動に及ぼす効果(2), *金沢大学教育学部紀要*, 34, 1-22
- 太田雅夫 1986 集団の自己調整システム：フィードフォワードとフィードバックの集団および個人活動に及ぼす効果(3), *金沢大学教育学部紀要*, 35, 19-34
- 太田雅夫 1986 対人関係の研究：自己と他者における対人認知の差異について(2) *金沢大学教育学部 教科教育研究*, 22, 265-270
- Masao Ohta 1982 Self-control system of small groups: Effects of feedforward and feedback, *Psychologia*, 25, 2, 71-80
- Masao Ohta 1986 Self-control system of small groups: Perception of the probability of group goal attainment and evaluation of achievement level. *Psychologia*, 29, 80-90
- Pryer, M. and Bass, B. M., 1959 Some effects of feedback on behavior in groups. *Sociometry*,

- 22, 56-63
- Rosenberg, S. and Hall, R. L., 1958 The effects of different social feedback conditions upon performance in diadic teams. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 57, 271-277
- Shaw, M. E., 1954 Some effects of problem complexity upon problem solution efficiency in different communication nets. *Journal of Experimental Psychology*, 48, 211-217
- Shaw, M. E., 1964 Communication networks. in L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, vol. 1 Academic Press
- Smith, K. H., 1972 Changes in group structure through individual and group feedback. *Journal of Personality and Social Psychology*, 24, 425-428
- Steiner, I. D., 1972 *Group process and productivity*. Academic Press
- Steiner, I. D., 1974 *Task-performing group*. General Learning Press
- 続 有恒 太田雅夫 1958 集団の自己調整機構の研究 2. *心理学研究*, 29, 253-263
- Weiner, B., et al., 1971 Perceiving the causes of success and failure. In Jones, E. E., et al. (eds.) *Attribution: perceiving the causes of behavior*. 95-120, General Learning Press
- Zajonc, R. B., 1962 The effects of feedback and probability of group success on individual and group performance. *Human Relations*, 15, 2, 149-161
- Zajonc, R. B. and Taylor, J. J., 1963 The effect of two methods of varying group task difficulty on individual and group performance. *Human Relations*, 16, 4, 359-368
- Zajonc, R. B. and Brickman, P., 1969 Expectancy and feedback as independent factors in task performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 11, 2, 148-156
- Zander, A. and Forward, J., 1968 Position in group, achievement motivation and group aspirations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 8, 282-288
- Zander, A. and Medow, H., 1965 Strength of group and desire for attainable group aspiration. *Journal of Personality*, 33, 129-139
- Zander, A. and Newcomb, T. Jr., 1967 Group level of aspiration in United Fund Campaigns. *Journal of Personality and Social Psychology*, 6, 157-162